至誠沈勇

米内光政会会報　創刊号



写真提供：盛岡市先人記念館

目　次

新たな「米内光政会」の発足にあたって　藤井　茂……1

米内光政をめぐる人々　平野ユキ子……3

「米内を斬れ」に込められた想い　横田裕之……11

米内光政とその周辺①　寄り添った控えめな妻・コマ　編集部……12

年次事業実施状況　編集部……14

■新たな「米内光政会」発足にあたって

米内光政会会長　藤井　茂

「米内光政会」が二〇二〇年十一月二十九日、約十年ぶりで再び発足した。〝再び〟というのは、一九八七年四月から二〇一一年三月末（ちょうど東日本大震災のあった月）まで二十四年続いた「米内光政会」が以前にあったからである。それが解散され、ほぼ九年半余り休止していた。

米内光政の人物に惚れていた私は、以前から「米内光政会」再発足の話題を持ち出し、首尾よく会が発足した暁には、喜んで協力したい旨を何人かに伝えていたが、そんな折も折、米内光政の曾孫である米内紘正君が盛岡に引っ越してきていて、そのうち県会議員に立候補するという噂を耳にした。

それから間もなくの二〇一九年初秋、周囲の応援もあって米内君は当選した。いよいよ会も発足かと期待していたところ、すでに水面下では動いていたらしく二〇二〇年春、私を会長（暫定）にとのことで驚いたが、受けてしまった。折しもコロナ禍でもあったので、慎重に数回の会合を重ね昨年十一月末、盛岡グランドホテルでの発会式となった。

当日は盛岡市議・菊田隆氏のテキパキとした議事進行で発会式が進められ、谷藤裕明盛岡市長や階猛衆議院議員、鎌田英樹ＩＢＣ岩手放送社長らから、過分なまでの祝辞を頂いた。

そのあと、「米内光政の魅力」と題して記念講演をした。この講演で私が気をつけたことは、従来の海軍色をあまり出さないようにしたことだった。そこで演題もそのようにし、米内の人間としての魅力がどの辺にあるかに焦点を絞って話した。

もう一つ、それは講演の最後に述べたのだが、「この会は決して米内紘正君を応援する会ではない」ということも強調した。米内君を応援する会は別にあるし、選挙の時、動き出すようになっているからである。これは、くれぐれも注意を払わないと、これ以後も誤解されかねないと思い、特に気をつかった。そのことに関しては当日、副会長の吉丸蓉子さんが私よりも先に強調したので、私は意を強くすることができた。

そこで今回の「米内光政会」だが、従来のごとく海軍での動きに重きを置き過ぎることなく、人間米内光政に焦点をあて、米内という人間から何を学ぶことができるかに力点を置いた会にしたいと思っている。米内光政の生涯は、じつに多くの学べるものを蔵しているからである。

それらのすべての原点が、若き盛岡中学（現盛岡第一

高等学校）の生徒の時代、二歳後輩の金田一京助との柔道の朝稽古にすでに見られると私は思っている。柔道の心得など全くないに等しい金田一を、徹底的に投げ飛ばさなかったその姿勢に、私は米内の生涯を貫いた優しい清らかな慈悲の精神がすでに垣間見えているように感じる。

それはまた反面からすれば、何事にも徹底さを欠き、相手に付け込まれる口実を与えかねないという危うさも感じられるのだが、そういうことすべてを含んで、私には米内の人間的魅力に思えるのだ。

いずれにしろ、そういう米内光政の精神を我々の心としたいがために、このたび「米内光政会」を立ち上げたと言っていいかもしれない。

それと並行して昨年十二月二十七日、ＩＢＣ岩手放送では記念番組「大いなる楯　米内光政」を制作して放映し、会発足に彩りを添えた（再放送は本年一月三十一日、ＢＳ・ＴＢＳで放映された）。米内の生涯とともに、人間性が色濃く前面に出た清々しい番組であった。（本文は、今年四月号の『街もりおか』に掲載した「新たに設立された米内光政会」の文を加筆訂正したものである。）

藤井茂略歴
米内光政会　会長
一般財団法人　新渡戸基金　理事長



■米内光政をめぐる人々

平　野　ユキ子（旧姓：豊川）

私にとって大叔父に当たる米内光政（＊1）は、一八八〇年（明治十三年）に岩手県盛岡市に生まれ、盛岡中学を卒業してから海軍兵学校に入校しその後一九四八年（昭和二十三年）に亡くなるまで、ひとえに日本の『盾』となり日本を滅亡の淵から救ったことで知られております。

日本は、明治開闢（かいびゃく）以来アジアにあって近代化をいち早く成し遂げ、当時は欧米の列強の植民地とされたアジアのなかで植民地にならなかった数少ない、たった二国（日本とタイ）のうちの一つでした。

当時は人種差別が当たり前で、白人以外は劣等民とされていました。

日本は当時の欧米を中心とする世界では名も無き一小国にすぎなかったのです。それにもかかわらず日本は大国ロシアに戦いを挑み、そのロシアを相手に勝利を収めて世界をあっと言わせました。この頃、日本人は非公式に「名誉白人」という称号で呼ばれたと言います。

その前の日清戦争においても勝利を収めていた日本は、この日露戦争の勝利によって（特に陸軍は）驕り、その後の世界の大局の見方を誤ったと言えるかもしれません。（＊2）

米内光政は日本海軍に籍を置き、海軍にいたからこそ諸外国の事情に通じた広い見識を持っており、時の世界の情勢については見方を誤ることなく、故に果敢に三国同盟及び太平洋戦争開戦に反対したのです。特にアメリカの豊かな物量を鑑みれば、当時の貧しい日本ごときの資源では、到底かなわない事は自明の理でした。しかし狭い見識に囚われた陸軍は米内の反対に耳を貸さず、陸軍の主導により日本は三国同盟を強行に締結、世界を相手の戦争に突入してしまうのです。

そして苦戦となった太平洋戦争の末期、日本は壊滅寸前の状態となりました。それでもなお陸軍は根拠のない精神論を掲げ「本土決戦」を主張…。あわや日本は消滅するかというとき、米内光政は身を賭してこれを食い止め、ポツダム宣言を受諾、無条件降伏に持ち込み、日本を滅亡から救ったのです。米内光政はまさに日本の「大いなる盾」となりました。

この太平洋戦争開戦前夜の時期に、私の父（豊川種英）は東京商大（現・一橋大学）の学生として米内家に下宿しており、この頃の米内光政を身近に知り得たことから、この頃のことをつぶさに知っておりました。父は、米内光政と同じく寡黙で余り多くを語ることなく亡くなりましたが、他の誰よりも米内を身近に知ってお

り、その頃のエピソードも幾つか語っております。

まさに開戦前夜の或る時、一将校が米内家を訪れて「閣下はご在宅か…。」と、玄関に出た父に問いました。

その頃の米内家は一国の宰相とも思われぬ大変質素な生活をしておりました。父は東京商科大の学生として下宿していたのですが、雇う人も少ない質素な米内家のため、書生の役目を果して切り盛りを助けていたのです。

玄関に出た父が「生憎（あいにく）、まだ戻っておりません」と申しますと、その将校はおもむろに懐から書付を取り出し、読み上げました。

「…陸軍省は陸軍大臣・畑俊六の後任を立てるに能わず、よって、米内内閣は総辞職と相成った…。」と読み上げ、書付を父に渡し、「閣下がお帰りになられたら、お渡しの上お伝えいただきたい。」と、述べて帰って行ったそうです。

「…私は畏まって受け取るより仕方がなかったのだが、あの時歴史の歯車が回ったのだな…。」後年父は、私にこのように語ってくれたことがありました。

ところで実はその将校の訪問の一両日前に、一人の人物が訪れていたそうです。

「…閣下はおられますか?・・・畑俊六です・・・」と。

その時も米内は不在だったため、取り次ぐことは出来なかったとのことでした。畑俊六と言えば時の陸軍大臣であると言うのは無論父も知っています。米内大臣が帰宅後、父が畑俊六陸軍大臣の私的な訪問のことを伝えると米内は「…そうか…。」と言っただけでした。

当時の内閣は、「軍部大臣現役武官制」によって陸軍大臣と海軍大臣が揃わないと組閣にならない仕組みになっていました。従って陸軍の圧力が日に日に強まる中、米内は、畑俊六陸軍大臣に「決して辞めないように…。」と念を押していたのです。（＊3）

そもそも当時米内は海軍大将でありながら、昭和天皇の直々の指名により海軍大臣となった経緯があります。天皇が内閣の人事に口を出すことは決してなかったなか、そしてまた米内も実は政治に介入する立場となる意思は全くなかったにもかかわらず、こうした異例の経緯によって海軍大臣を拝命した、という流れがあったのです。

昭和天皇は『三国同盟』及び『太平洋戦争開戦』に絶対反対の立場の米内を海軍大臣に任命し、米内を総理大臣として組閣することで戦争を回避しようというひそかな意思があったとみられています。

米内は、もともと日本の国力では英米相手の開戦は、勝ち目は無いと見通し、開戦に反対した立場にありました。従って天皇は、次の首相にまた陸軍大臣がなるであろう流れの中で異例にも米内を指名した、と思われます。米内が内閣に入り首相となったことで陸軍の『開

戦』への意向は、いったんは阻まれたのですが、それは危ういものであったのです。

陸軍の日に日に強まる圧力の中で自分の内閣を維持することが天皇の御意にかなうことであると米内は戦争回避のため、鋭意努力していたのです。陸軍大臣の畑俊六が辞任すれば、その時は最後だと感じていたことでしょう。

従って「決して辞めないように…。」と頼んでいたのですが、畑俊六は陸軍の圧力に屈服せざるを得なくなったのでしょう。米内は家庭内でこのようなことは話す事は無かったのですが、こうしたことは、「言葉による説明」より、動きや流れ、出来事などにより、あとからハタ、と得心が行くものです。

父は、後年「あの時 畑俊六陸軍大臣は、米内に内々に『…御意に沿いたく何とか頑張ってみたが、どうも難しい、駄目のようだ…。』と、伝えに来たのではないだろうか…。」と語っておりました。

畑陸軍大臣は米内に対して義理堅く感じて、事前に（私的に）伝えに来たのではないか、というのでした。そのとき米内は不在だったために、畑俊六はそれを伝えきれず、その後に父の受け取った将校の通知（畑俊六陸軍大臣の辞任による米内内閣の総辞職）があったという事になると一連の出来事は符合します。米内が、畑俊六陸軍大臣が辞任したことを表立って責めたりしなかったのは、こうした流れと時代の趨勢を理解し、言外に畑大臣の苦悩を感じ取ったからだろうと思います。

戦後の「東京裁判」においても、畑陸軍大臣始め戦犯として被告席に立たされた日本軍の幹部を、米内光政は飽くまでも庇っての答弁に終始したことは周知の事実です。米内は虚偽にならないギリギリの程度にとぼけたり、言を左右にして陸軍の幹部を庇い通し、罪に問われないようにしたことは、敵国側のアメリカのキーナン検事もうならせるほどの見事さだったようです。キーナン検事はこの米内の態度に「敵ながらあっぱれ」と感じ入ったようで、何度も私的に米内を夕食に招待しています。米内はこの招待に一度も応じたことはなかったのですが、父はこのことを「…『けじめ』をつけたのだ」と表現しています。

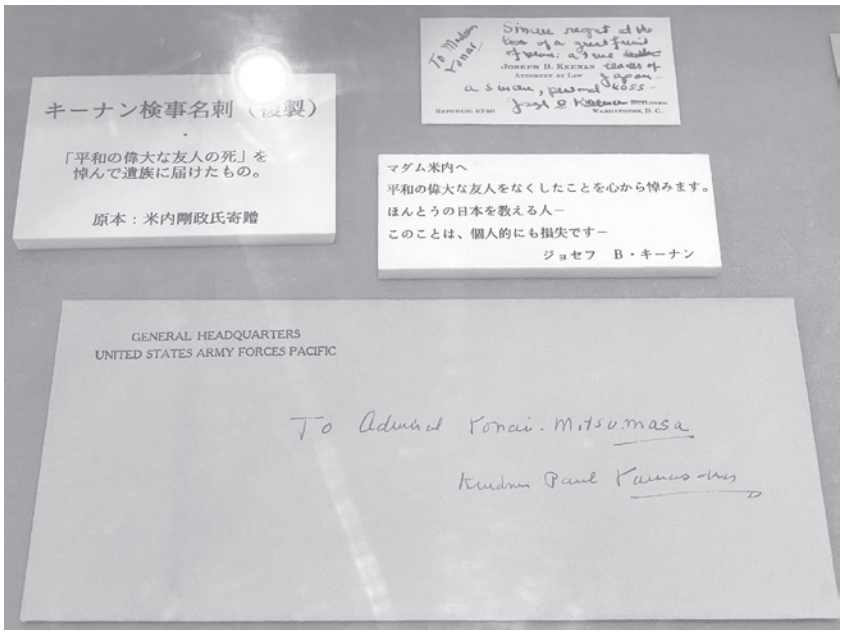
戦勝国のアメリカ検事から夕食に招待されるのは、その当時の事を鑑みれば誠に稀有で非常に名誉なことでもあり、ふつうは畏まって受けるのが当たり前とも思うのですが、ここが金銭にも名誉にも恬淡としていた米内光政らしいところだと思います。言い方を変えれば「欲がない」とも言えます。私の父もそういう性格だったのでここはよく理解できます。

一方、キーナン検事は夕食を共にしてゆっくり語り合いたいと思っていたのに叶わず、いたく残念に思いながらも余程米内の人柄にひかれたようなのです…。

東京裁判が終わり、昭和二十三年、証言を終えた米内

は朽木が倒れるがごとく亡くなったのですが、その訃報を聞いてキーナン検事から米内の死を悼むメッセージが米内夫人へ届きました。

キーナンの名刺に書かれた〝To Madame Yonai…（米内夫人へ）〟と始まるメッセージは、…（以下英文和訳）「平和の偉大な友人をなくしたことを心から悼みます。ほんとうの日本を教える人―　このことは、個人的にも損失です―　ジョセフ　B　キーナン」とあり、現在「盛岡市先人記念館」で所蔵、米内光政のコーナーに公開展示されています。（この時は既に米内光政のコマ夫人は亡くなっていたので受け取ったのは母堂のトミ夫人です。）



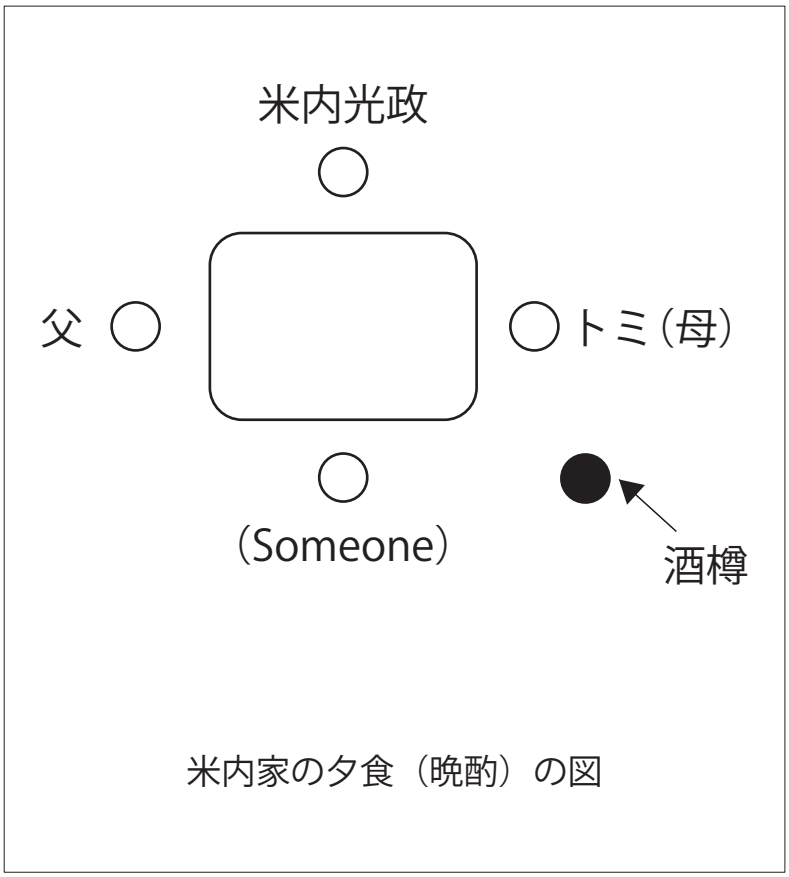
写真「キーナン検事」メッセージ

盛岡市先人記念館 所蔵

さて、わたしの父は、その頃米内家に下宿していたと前述しましたが、実は米内大臣の帰宅後はともに夕食を摂るのが普通でした。その際は必ず晩酌の相手をした…。その時の様子を父から聞いているので図解しておきます。

米内大臣と父、一方には食事の世話をするためトミ夫人がおり、もう一方にはその時によって「誰か」（〝someone〟と父は申しました）が居ることもあった。光政の長男の剛政氏の時もあったが、剛政氏は慶応ボーイで学生であり、いないことが多かったそうです。父も学生でしたが、本家の長男（跡取り）として米内家に下宿させてもらっている立場なので、書生として米内家を助ける働きをするため余り外出はしなかったようで、これは父なりの「けじめ」をつけていたと思われます。

またコマ夫人はとても控えめな方で他の姉妹や次男の崇志氏と共に奥にいて、このような時にほとんど表に出ることなく、この時の食事の世話やお酒のお酌などは母のトミ夫人が仕切っていたと聞いています。



米内家の夕食（晩酌）の図

さて、このように夕食を共にするとき二人は、必ず晩酌をしたそうです。

父の話によると、米内大臣はお酒が強く・・・これは豊川家の血統なのです。

米内がロシア駐在の時には、ロシア人を相手にウォッカで相手を飲み負かすこともしばしばだったとか。父も豊川家の血統として、かなりお酒の強い人でした。父はウィスキーを毎晩一本空けるほどの酒豪でしたが、私はそれが普通だと当時思っていたものです。

晩酌をするとき二人のそばには「樽」（一斗樽？）が置かれていた、と父は述べていました。それほど強い二人がお酒を飲めば、単なる晩酌といっても一升や二升では済まなかったでしょうから、納得できる話です。

さて、飲むときの様子ですが、二人とも実に寡黙ですから、黙って飲む・・・。お酒を注がれると二人ともスッと飲み干す…と言う感じだったようです。

米内大臣は政治など国の大事にかかわることは一切家で話す事は無かったが、一般的な情勢についてはときどき語ったようです。当時の情勢として「三国同盟」には反対だとは内外に語っていたようですから、父は晩酌時に米内が「…三国同盟には反対である。」と言うのを聞いています。

「…経済は最小の努力をもって最大の効果を得（う）るものだ…。かようなＡＢＣＤライン（**＊4**）を敷かれては日本としては経済・物資面で非常に困るが…かと言って、『日独伊同盟』には反対だ。英米を敵に回すことになる…。」と。

米内は海軍にいて欧州駐在も経験し、渡米もしており海外の状況も熟知している、そして部下である山本五十六は駐米経験もあるので、やはりアメリカの物量の豊かさなど外国の実情は熟知していました。到底物量で日本は敵うわけはない、とわかっていた二人の間の「開戦反

対」の意志と信頼は揺らぐ事は無かったと思います。
しかし他の者たちには、どこまで理解できたでしょうか…そして時代の流れはこういった良識的な思いを怒涛の如く流し去り、ついに日本は戦争へ突入することとなったのでした。
それにしても日本は何故、当時『外交』と言う手段で国難を打開する努力をしなかったのでしょうか。色々読んでみても、余りそのことに触れたものはないのです。
日露戦争の時は、貧しいアジアの小国に過ぎない日本が大国ロシアに勝つために涙ぐましいほど外交においても努力していることを思うと誠に不思議です。
ロシア相手の戦争においては、戦費の調達を始めとし、背後における支えを怠りなく、そして実際の戦闘における戦力と同じくらいに兵站を大事なものと捉え、準備しています。また当時の貧しい日本の在り方を考えて戦争終結の落としどころとして、適切な時期に講和に持ち込むために事前の準備と外交努力もしています。
ところが、この太平洋戦争の時にはそういったものが殆どなく、根拠のない精神論を振りかざした末、講和に持ち込むタイミングを計るどころか最後は世界中を敵に回してしまうような戦況となってしまった。実に残念だし、甚だ理不尽であり不思議とさえ感じるのは私だけではないだろうと思うのです。
ところでこのころ私の父（豊川種英）は、父親の豊川孝一が熱海で脳溢血で急死したため、学生でありながら家業を継ぐこととなり、盛岡へ帰省せざるを得なくなります。ここで父は父親の「孝一」の名前を継承して「豊川種英」改め「豊川孝一」となりました。また、父と入れ替わりに 弟の豊川種彦が米内家に世話になることになります。種彦叔父は慶応大学に入学したのでした。米内光政の長男の剛政叔父と同じ大学です。私は種彦叔父からこの頃の話を直接聞いたことはありません。
評論家や作家等の取材が来ても、父は敢えて多くは語らず取材も拒否していました。父は「起居を常に共にしていて、確かに米内光政は偉い人物であったと思う。ただそのことを身内の私から滔々（とうとう）と話すのは、どうも自分が自慢しているようで話し難いことだな…」と言い、取材など来ても断わるのでした。一方、種彦叔父は父と異なり饒舌な質（たち）で、進んで話すところがありました。叔父は父と異なり取材を断ることがなかったので、取材等は種彦叔父の方に偏っています。
叔父の種彦が世話になっていた頃の米内家は、家族で一緒に食事（夕食）を摂ることもしばしばだったように書かれており、私が父から聞いた上記に述べた様子とは違っています。
それを何故かと考えますと、当時の在り方として、本家筋の家督を継ぐ者への対応とみることが出来るかもしれません。当時は、長男は家を継ぐという事から特別扱

いされたものです。
　戦前は家を継ぐのは長男と決まっていました。兄弟が均等に相続権を持ったのは戦後の事です。家督を継ぐ代わり長男には、家を守る義務（両親の扶養義務も含めて）と役割とするべき儀礼的なしきたりがあったものです。
　儀礼的しきたりと言えば当時の士族は各家ごとに様々なしきたりがあったと思いますが、豊川家ではお正月の「若水」を汲むのは長男の役割でしたし、お盆の仏さまへの行事や親戚の墓参りなども長男が特別に早朝に行うなど、長男のすべき儀礼的なしきたりなどは私の子供の頃はまだ幾らか残っていました。
　戦後は相続権は平等になったが、親の扶養義務はなおざりにされてしまったため、現在、誰が親の面倒を見るかで揉め事が絶えなくなっているようです。戦前の日本では考えられない事態が生じていると言えます。私は、両親が「かつて（戦前）の日本の制度の方が良かったのではないか。自由や平等というのは、義務と道義を果してこそのはずだが…。」と話しているのを記憶しております。
　父と種彦叔父の話で家庭内での在り方が少々違うのは、種彦叔父がいた頃の米内家は米内光政が閣僚ではなくなったことも一因かも知れません。短い間ながら公式なお勤めから解放されて家庭で家族と過ごす時間も若干ながら取れたからかも知れないとも思うのです。
　父がいた当時は米内光政は海軍大臣と言う立場で閣僚として政治に携わっていた立場であり、父が書生としての役割を果たしていたことから、安易に家族にも聞かせられない話などが出る可能性もあったため、家族とは別に食事をしたのかもしれません。父が亡くなった今ではもう確かめられませんが…。
　ただ父もそうですが、家庭人としての米内光政は、案外家庭的なところがあり、また性格的にも穏やかな性質（たち）だったようですから、家庭においては叔父が語ったような過ごし方をしていたという事は充分あり得ることと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　さて、昨年は米内光政生誕一四〇周年ということでBS　TBS系で一四〇周年記念番組が制作されました。このようなときに、かつての「米内光政会」が、改めて立ち上がったのは、誠に喜ばしく、親族の一人としては誠に有難いことです。
　今年一月三十一日十一時～十一時五十五分に「大いなる盾」というタイトルで放映されましたが、激動の時代を背景にしている割に穏やかな仕上がりとなっておりました。これはあまり知られることのなかった米内光政の

家庭人としての在り方や取り巻きの人間関係などを中心にして描いたからではないかと思います。

これを機に、米内光政のこういった背景にスポットを当てることも良いのかもしれないと私は思いました。また、米内光政の人格を形成したであろうこれまで知られざる一面を、私の知り得る事柄を述べてみるのも或いは余人にとっても一興となるやもしれません。

次回は、こうした米内光政にまつわる知られざる面を、私が父から聞いたことなどを基に、また調べた事なども交えて述べていきたいと思います。

令和三年十月　吉日

【注釈】

＊1　私の曽祖父の弟は受政（ながまさ）と言い豊川家から米内家に養子に行った。当時米内家に一人も子供が生まれず「お家断絶」と言う事態を避けるため一番近い親戚である豊川家から受政を養子とし、松尾家からトミ女を迎えて生まれたのが光政である。家系図は後程披露しようと思う。

＊2　私見（しけん）ながら、戦争におけるこうした日本の勝利はいわゆる「黄禍論」を強め、その後の世界のアジア（特に日本）に対する欧米の考え方に影響を与え、その後の世界情勢に大きく影響を及ぼしたのではないか、と私は思う。

＊3　阿部信行陸軍大臣の内閣ののち、次に再び陸軍大臣が総理大臣となる流れの中、海軍大臣の米内光政が内閣総理大臣として組閣されたのは、本文中で述べたように、時の天皇の意思を汲んで成されたのである。当時、もし畑俊六陸軍大臣が辞任すれば米内内閣は、総辞職となってしまう。三国同盟に反対し戦争を回避するという天皇の意志を何とかして実現しようとの米内の思いを感じる。

＊4　ＡＢＣＤ（アメリカ、イギリス、中国、オランダ）の経済包囲網。これを敷かれては、当時の日本としては物資の輸入路をすべて断たれるわけで、資源のない日本としては開戦に踏み切らざるを得ない。アメリカ、イギリス等はこのようにして追い詰め、わざと日本を戦争へと導いた、という説もある。

戦後東京裁判で日本が裁かれることとなったとき、戦勝国側ばかりの裁判官の中でインドのパール判事は唯一、日本の開戦は欧米のこのような経済封鎖からやむを得ないもので、「侵略戦争では決してなかった」ことを主張している。また日本が「欧米による人種差別の打倒」をこの戦争によってなし得たともパール判事は述べている。事実、戦後に多くの国が植民地支配から脱却し、独立国となった。

平野ユキ子略歴

元岩手県議会議員

スペシャルオリンピックス日本（ＳＯＮ）・岩手　理事長

岩手大学　仏語講師

■「米内を斬れ」に込められた想い

たうえ屋たうえ塾代表　横田裕之

米内光政会の復活おめでとうございます。その会報創刊号の寄稿に何てタイトルつけるのだ！と怒られる事を覚悟でこのテーマを論じようと思います。

宮城事件をご存知でしょうか？　この事件は終戦の前日、陸軍青年将校が玉音放送の原盤強奪と戦争継続を企てたクーデター未遂事件です。陸軍暴走と終戦の混乱を象徴するこの事件は殆どの日本史の教科書に載っていませんが、太平洋戦争と終戦を知る上で非常に重要な事件です。

自らの命を以てこのクーデターを鎮め、無事に日本を終戦に導いた阿南惟幾という陸相がいます。阿南陸相が自決の前夜に義弟の竹下正彦と酒を酌み交わす中で残したのが、この所説残る「米内を斬れ」という言葉です。

同席した竹下の解釈では「酔いもあり深い意味はなかった」とされ、現在ではこれが通説となっています。しかしこの言葉ひとつをとっても、終戦における米内の役割をより深く学ぶ事ができると私は考えています。

直前まで一撃講和か無条件降伏かで意見が対立した事で有名ですが、お二方とも戦後国体の護持を最優先に考え、終戦における最善の着地点を模索していました。近年の研究で、二人は親交があり、互いに軍人として深い敬意を持っていた事が解っています。

自決直前の事ですから陸相は戦局の分岐点を何度も総括されていたことでしょう。また数日前には青年将校が独断で戦争継続を全国に発信する「陸軍大臣布告」を出した事件もありました。阿南はさらなる暴走を危惧してこれを庇ったと言います。もはや聖断をもってしても陸軍を束ねる事は極めて困難な状況でした。しかし陸相の自決で東部軍は蜂起せず、クーデターが未遂に終わったことで翌日の無事玉音放送が実現します。

私が思うに「米内を斬れ」という言葉は、大所帯で統率がとれない陸軍の身内や、将校の暴走に手を焼いた自身の境遇などを振り返り、一方では腹心の部下に恵まれ、彼らに支えられながら淡々と終戦の準備を進める米内に、悔しさと同時に羨ましさも少しはあって口を突いてでた一言だったのではないかと考えるのです。

阿南陸相は自決を以て即座に陸軍を鎮め、米内海相は生きて海軍解体と国体の護持に尽力しました。あと数日降伏が遅ければ北海道、東北あたりまではソ連領だったとも言われる中で、日本は無事終戦を迎えました。そのお陰で今我々は平和に暮らすことができています。お盆が近づくと、その事を強く感じずにはいられません。

この会の趣旨は米内光政の生き様と心を伝えていく会だと伺っております。それと同時に米内だけでなく、日本を守ってくださった全ての先人達に感謝と敬意を込めて、多くの学びを育み、伝え残す会であってくれたらと願っております。

■米内光政その周辺①　寄り添った控えめな妻・コマ

米内の妻のコマ夫人が亡くなった昭和十六年（一九四一）一月十九日、子どもたちの前で米内が初めて涙を見せたときのセリフが残されている。

「結婚して三十四年、任地へも連れていかず、貧乏生活の苦労ばかりさせて、これからどこか遊びに連れ出してやれるかというときに、お母さんは死んでしまったね。かわいそうなことをしてしまった」

葬儀はまったく質素で、これが半年前まで総理大臣だった人（米内は昭和十五年一月から同年七月までの半年間、首相であった）の奥さんの葬儀かと疑われるほど簡素なものだった。病名は「胆石に胆嚢炎を併発し…」と発表されたが、胃がんの可能性もあったようだ。というのは、米内が首相の間、コマ夫人は夫の暗殺の噂をしきりに気にかけていたらしく、それで胃の痛みを訴えはじめ、米内内閣が総辞職をしたあとの昭和十五年（一九四〇）十月以降、寝たきりになり、三か月後に死を迎えたからである。

コマは米内より八歳年下の明治二十一年（一八八八）、東京赤坂の生まれで、米内が中尉のとき嫁に来た。日露戦争が終わった翌年の明治三十九年（一九〇六）六月のことだった。コマの父は大隈金太郎といい、お茶の師匠（号は宋民）をしていた。

コマ夫人は米内とは対照的に歯切れのいい東京言葉を話したが、内面では東京の人には珍しいほど控えめな女性だった。いつももの静かで、晴れがましい場所にはめったに顔を出さない人でもあった。米内が横須賀鎮守府長官として主催した宴会場でのこと、コマ夫人が地味な着物を着て、いつものように後ろのほうに隠れているので、副官が「奥さん、ほかの者が困りますから、もう少し正面にお進みください」と促さなければならないほどだった。

米内は海軍兵学校卒業後、少尉に任官して初めて郷里の母トミを迎えた。もっとも、父受政（ながまさ）は早くから東京に出ていたので、やっと親子三人、水入らずの生活を楽しむようになった。しかし、受政は依然として発明に没頭していたので、その資金は米内の給料から出さなければならず、親子三人での暮らしは楽ではなかった。自分の給料で足りないときは、友人たちから借金をしてまでも父に研究を続けさせたが、父の発明は一家を潤すまではいかず、したがって米内家はいつまでも貧乏暮らしを続けなければならなかった。

そういう米内一家に、コマは嫁いできたのだ。必然的に子どもは生まれるし、それにともなって必ずしも米内の給料が上がっていったわけでもないので、コマ夫人は最初からお金の苦労を背負ったも同然だった。

米内は海軍兵学校を中ぐらいの成績で終えたので、最初のころは普通の進度で昇進していったが、昭和になったころから海軍内で認められはじめ、海軍中将、連合艦隊司令長官、海軍大将というように、地位はぐんぐんと上がっていった。

しかし、米内家は依然として家計の苦しさから逃れられなかった。その原因はまったく米内の清貧な心がけからきていたといえる。

金銭に恬淡とした米内だったから、彼にはおよそ首相になるとよくあるような金銭疑惑は一つもなく、生涯まったく後ろ指をさされるようなところもなかった。その代わり、彼にとってもコマ夫人にとっても、家計簿に余裕のある時代はついにこなかった。そういうことに文句も言わず、隠れるように寄り添ったコマ夫人。彼女は生涯、非常に控えめに米内に仕えた人で、米内にはじつに似合いの妻であった。

（米内光政会編集部）



■年次事業実施状況

編集部

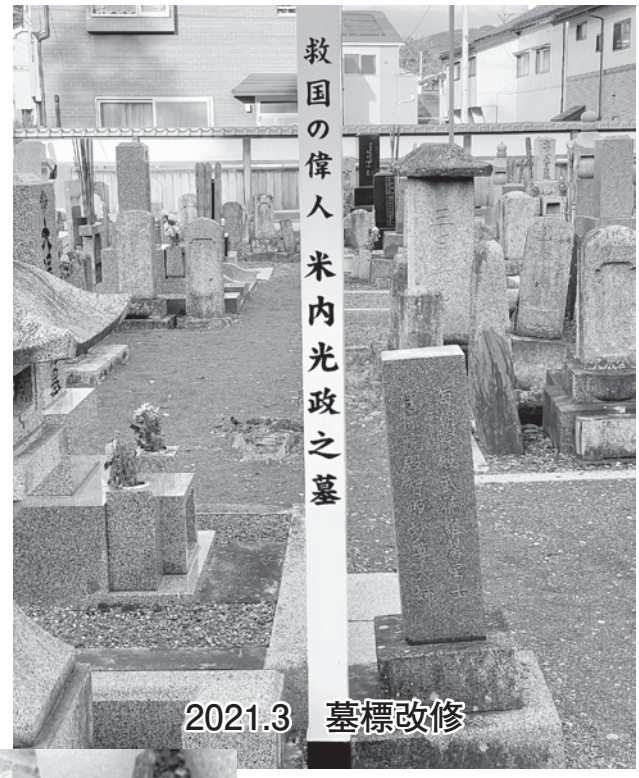
二〇二〇年二月二十七日　第一回　米内光政会設立世話人会　開催
二〇二〇年四月十八日　円光寺　墓参実施
二〇二〇月六月二十七日　第二回　米内光政会設立世話人会　開催
二〇二〇年十月五日　第三回　同上
二〇二〇年十一月十九日　第四回　同上
二〇二〇月十一月二十九日　米内光政会設立総会　開催
二〇二一年三月二十四日　第一回　米内光政会役員会開催
二〇二一年三月　米内光政会設立記念事業　円光寺「墓標改修、案内看板新設」



2020.11.29　設立総会



2020.11.29　円光寺墓参



2021.3　墓標改修



2021.3　案内看板設置



2021.4.18　円光寺墓参



2021.4.18　円光寺墓参

表題「至誠沈勇」について

表題の「至誠沈勇」は、盛岡八幡宮境内にある崇敬殿前の米内光政像の台座に刻まれた、経済学者小泉信三による文章より抜粋したものです。



米内光政会会報（創刊号）非売品

令和三年十月二十六日発行

発行所　米内光政会事務局

〒〇二〇―〇八八五

岩手県盛岡市紺屋町四―二十四

印刷所　河北印刷株式会社

盛岡市本町通二丁目八―七

令和３年10月